

高山社養蚕学校の建造物の歴史と概要

高山社養蚕学校は、ある男の独創的な考えにより作られた。その男とは、先見の明がある蚕生産者、教育者であり起業家でもある高山長五郎（1830～1886年）である。高山は、蚕の飼育法、清温育を考案し、自身の手法を推進するため、1884年に正式的に生徒を教えるようになった。この学校は、富岡製糸場と絹産業遺産群の一部として、2014年に、UNESCOにより世界遺産に指定された。高山社の建物は、日本の「絹革命」の記念となるものであり、群馬県の人々が養蚕と絹の糸取り技術（これらは今日でも世界の絹産業を下支えしている）の開発において重要な役割を果たしたことを示している。

高山長五郎は、蚕の繭の品質と量を向上させるための研究に情熱を燃やした。彼が考案した飼育法（清温育）を実現するには、蚕の飼育に使われていた伝統的な家を、最新のものに設計し直す必要があった。湿度、温度、換気の調整を容易にするため、床には火鉢が、屋根の棟には小さな高窓が組み込まれた。外壁の代わりに設けられた大きな引き戸は、養蚕室を清潔にすること、また、その室温を低く保つことを容易にした。

長年、高山家先祖伝来の邸宅の場所に建てられた建物が、訓練施設として使われた。長五郎は、朝鮮半島など、大日本帝国領の至る所から学生を受け入れた。彼は、帝国領中に教師を派遣し、彼の養蚕法はアジアの大部分において標準的なものになった。今日、長五郎の家は完全に復元されている。長五郎に建てられた2階建ての家屋と重要な建築である長屋門は、すべてが美しく保存されている。高山長五郎の遺産が未来の人々を元気づけることは間違いない。